

# 置かれている物の意味

## —共有空間での物の置かれ方から—

辰巳 郁子

### 0. はじめに



1-1 椅子という事象

ここに一枚の写真がある。ある教室での一場面を写したものである。教室のドアを開けて中に入った時、机と机の上にある教材のプリント、そしていくつかの椅子が目に入ってくる。そこで、あなたならどの椅子に座るだろうか。あなたは左端の椅子を引っ張り出してきて座るのだろうか。それとも中央の椅子に座ろうとするなら、先に来ていた人に「この席、空いていますか？」と一声かけて座るかもしれない。しかし、右端の椅子ならどうだろう。同じように先に来ていた人に「この席、空いていますか？」とわざわざ声をかけて座るだろうか。

### 1. 先行研究

#### 1-1. テリトリー

パーソナルスペース(Personal Space)とは、個人空間または個体空間のことであり、侵入者が入れないようにその人の身体を取り囲む、見えない境界をもった領域のことを指す(Robert Sommer,1972)。その一例として、サリー・ロビソン(Sally Robison)は、図書館で席が予約されているような状態を研究するため、席にいない間でもその席を確保しておくのに利用される置物を記録した。その結果、テリトリーの指示物として象徴的な意味—“立入禁止”とか“予約席”の標示—かあるいは、固有の価値—上衣、財布など、所有者が理由なく棄てるはずのないもの—をもっている物であることを必要とすると報告している(1972)。

#### 1-2. モノの世界

2002年、国立民族博物館で日韓共同開催の特別展と

して「2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし」が開催された。ソウルに住む李さん一家のアパートにあるモノ(飾り棚・使い捨てのライター・結婚指輪などなど)を徹底的に調べ上げ、その一切切を展示された。「そこに住んでいる人間について知る」ことを目標とし、モノから意味の世界を捉えなおすことが重要だと考えたためである。1点1点モノにラベリング作業を行いながら、モノこめられた思い出、各個人のモノに対する価値観などをみることで、モノを通してそれぞれの個人の生活スタイル、または家族について捉え直している。

### 2. 研究目的と意義

#### 2-1. テリトリーで語られなかったこと

複数の人間が共有する空間では、人それぞれ空間に対する目的や使い方にズレが生じてくる。1章で取りあげたテリトリー論は、こうした人間と空間の関係を知る上で貴重な役割を果たし、ある空間の中で自分と他者が共存する際の排他的行為についての説明を可能にするものである。

しかし、こうした他者が利用していた空間とこれから自分が利用しようとする空間とが重なる状況下で逆に馴染んでいく行為についての説明はテリトリー論では触れられていない。

本研究では、テリトリー論やモノの世界で着目された物の特性に留まらず「物の置かれ方」という様相にも着目することで、人は他者と共有する空間の中でどのように空間を読み取っているのかを具現化するものである。そうすることで、延長線上にあるテリトリー論での占拠するといった積極的な行動だけでは語られていない部分、消極的ではあるが空間に馴染んでいく行為への理解を補足する研究にしたいと考える。

### 3. 方法

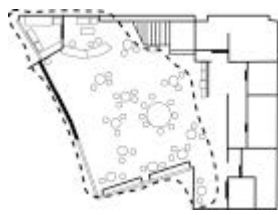
#### 3-1. 調査対象

ある空間の中に「置かれている物」を対象とする。

今回の調査で取りあげた対象数は、合計 215 である。ここではゆるやかではあるが、ふと目に留まったり、浮き立ったりしている様相を「置かれている物」の事象として取り扱う。

### 3-2. 調査対象地概要

調査対象地としてあげたのは、大学構内の研究室が 4 箇所、演習室が 2 箇所、大学構内のカフェが 1 箇所、教官室が 1 箇所の合計 8 箇所を調査対象地としている。いずれも特定の集団が何らかの目的を共有し、利用している空間を選出した。



3-1 カフェドア前から見た写真 3-2 破線部分がカフェとして利用

### 3-3. データ収集の手続き

#### 3-3-1. 写真に切り取る

上記の調査対象地において「置かれている物」と思える事象を調査対象とし、デジタルカメラを使って撮影した。撮影期間としては、2003 年 7 月から 2004 年 1 月まで断続的に撮影した。この作業によって 3-1 で定義した「置かれている物」として現れる事象の選択が自動的に行われていることになる。

#### 3-3-2. 記述

カメラを通して捉えた事象がどのように置かれているのか、またどのように感じるのかを事象ごとにそれぞれ記述した。記述内容は、事前にフォーマットを作成せずに連ねていった。写真と記述をデータとし、以下の分析を行った。

### 3-4. 分析手続き

#### 3-4-1. 発想法

分析には、Glaser & Strauss(1967), Strauss(1998) によるグラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して行った。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、特定の文脈における具体的体験に根差した理論の帰納的構築を目的とした質的方法の一つである。

#### 3-4-2. カードの作成

データを元にそれぞれの事象から表出した「置かれている物の見え方」を分析単位として区分けを行い、カードを作成した。1 つの事象を対象にしてもデータ内に複数の見え方が存在している場合は、それぞれの

見え方ごとに複数のカードを作成した。今回の作成したカード数は、合計 719 枚である。

#### 3-4-3. カード内容の把握と理解

内容の理解を深めるために何度も読み返し作業を行い、データの源となる物の名称や記述データの前後の文脈に捉われることなく、忠実にカード内のトランスクリプトのみから意味や概念を引き出すことを狙った。

#### 3-4-4. コーディング作業

整理したカードにその内容を端的に表すラベルを付け、カテゴリ（特性を共有するラベルをグループ化し、新たに抽象的なラベルをつけたもの）を生成した。生成したカテゴリ同士を比較したり、カテゴリ間の類似性や相違性の同定を繰り返したりすることで、新たなカテゴリの生成や既に生成したカテゴリの修正を行った。

## 4. 結果と考察

こうした分析作業の結果、以下にあげる事象を基にいくつかのカテゴリを抽出し、さらに大きく 2 つのカテゴリに分別することができた。

### 4-1. 受けとめ方カテゴリ

第 1 の物の置かれ方をどのように受けとめているかを示す「受けとめ方カテゴリ」には、目立ち・存在感・違和感・バイタリティー・清潔感・開放・閉鎖を抽出することができた。

#### 4-1-1. 目立ち

目立ちは、ある事象の周り（他物や部屋全体）との位置や距離から生成され、その周りとの機能性カテゴリの比較から事象が浮き立つように見えている様相である。特定の行動を示唆する機能性をもったメモ書きという事象、または、特定の人に利用する帰属先が強く表出される機能性をもった鍵という事象、機能性として遊動しながら利用されることが多いリモコンという事象などがあげられる。

#### 4-1-2. 存在感

存在感は、上記の目立ちのように比較の中で浮き立ってくる現象とは異なり、他物や部屋全体の中に埋もれながらも独立してひっそりとたたずんでいる現象である。そのため、他物や部屋全体との位置や距離の関係を必要とせず、むしろ他物や部屋全体との中での形状や機能性が重要な役割を担っていることが分かった。大きく広い形状をもったボードなどは、他物や部屋全

体に対して空間を占める率が高く、目に入りやすい。こうした目に入りやすい形状（大きい、重い、広い、高いなど）をもった事象は、固定された位置にあり続けることが存在感という現象を生成している。

#### 4-1-3. 違和感

違和感は、部屋全体との関係に対してある事象が馴染まずに、浮いている現象を指す。部屋の利用目的や利用方法から生成されるイメージなどが基盤になり、そうした基盤の上で機能性と位置と帰属との関連から生成されていることが分かった。辞書という事象では、教室という公共物しか置かれていないイメージをもつ空間に個人で利用されやすい私物が1つだけ存在することで、辞書は部屋全体から浮いた存在になっている。

#### 4-1-4. バイタリティー

バイタリティーとは、本来物が備えている機能性だけでなく、ある人が利用しやすいように特異な意味を付け加えられた事象に生成される様相である。バイタリティーは、その物の意味が発揮される時間が完了することで帰属という要素に関係なく、消えていく現象だということが分かった。

機能性を発揮し終えたビニール袋は帰属先があったとしても、バイタリティーが失われたと受けとめられて、所有者の理解なく



しに他者が捨てたとしても、おかしいと思わない現象が起こるのである。

#### 4-1-5. 清潔さ

清潔さは、上記のバイタリティーのある事象と異なり、ある事象が他の物との関係や部屋全体との関係に対する距離や位置や角度が重要な役割を持つ。お菓子の事象では、中身が入っているというバイタリティーだけではなく、「立って」置かれていることで清潔感を保っている。逆に同じく、中身の入っているお菓子でも「倒れている」置かれ方では、「ごちゃごちゃ」した感じで清潔感がないと受けとめていた。

#### 4-1-6. 開放

開放は、利用する人を選定するのではなく、逆に人を限定せず自由に利用できる置かれ方、むしろ人に利用される融和的な置かれ方と受けとめることができる現象である。開放は、周り（他物や部屋全体）に対する角度の違いが説明要素を果たしていることが分かっ

た。写真たてという事象では、「椅子の方向に向かって」置かれていることで、他者に向けて見せかけているように受けとめていた。

#### 4-1-7. 閉鎖

閉鎖は、上記の開放と対極にあり、利用する人を限定したり、禁止したりする排他的な置かれ方と受けとめられる現象を指す。パーソナルスペースでは、帰属によって閉鎖という現象を説明している。しかし、帰属先が固有の価値をもった物であっても、占領していると受けとめられない事象もある。

書類という事象では、「読みかけ」と行動の途中であり、さらに「まだこの先、作業が続く」と受けとめられていることで



4-2 書類という事象

「勝手に利用することはできない」と受けとめている。このように、帰属だけではなく、位置や時間から、閉鎖という現象の説明を補足することができる。

#### 4-2. 様相カテゴリー

第2には、「受けとめ方カテゴリー」であげた現象を説明する「様相カテゴリー」があり、機能性・時間・大きさ・位置・角度・距離・帰属・遊動と不動・他物との関係・部屋全体との関係を抽出することができた。

##### 4-2-1. 機能性

機能性とは、人の目的に応じて分化した働きをする性質、またはその物としての十分な働きを発揮する性質のことを指す。丸椅子という事象では、椅子という物が本来持っている「座る」という部分の機能から分化した「物を乗せる」という機能を発揮している。

##### 4-2-2. 時間

時間は、7つの時制に区別することができた。黄色のチョークという事象では、トランスクリプトに「小さくなっていて、もう使用されていない気がする」とあり、過去完了形に属する。それぞれの事象には区切られた時間が存在することが分かった。



4-3 事象から分別した7つの時制



#### 4-2-3. 形状

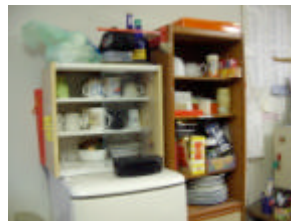
形状は、形・大きさ・重さ・高さ・広さ・色を指す。ボードという事象のようにある程度の大きさが伴うことで部屋を仕切るという機能を追加させている。

#### 4-2-4. 位置

位置はある事象が全体の中で占める・場所を指す。植物という事象では、円卓の中央に位置する所にある。トランスクリプトに「部屋全体の軸のように…」とあるように部屋全体との関係カテゴリと関連している。

#### 4-2-5. 角度

角度は、ある他物に対する事象の向きの割合・方向などを指す。カップという事象では、「逆さ向きに」置かれていることから、管理された置かれ方として清潔感に影響を与えている。



4-4 カップという事象

#### 4-2-6. 距離

距離は、著者自身の立ち位置から見た際に置かれている物との間の長さという物理的距離に限らず、心理的距離を含む。テレビの事象では、「手をのばさないと届きにくい距離」であることで、「目障りにならない」と目立ちに影響を与えている。

#### 4-2-7. 帰属

帰属は、最終的にどんな人・機関のメンバーの一人として、そこで一定の役割を担うことである。帰属先の決定には機能性カテゴリが関連していることが分かった。椅子という事象は、「特定の人が座る席に見えるので使いにくい」ように閉鎖に影響を与えている。

#### 4-2-8. 遊動-不動

遊動は、あちこちと所を定めずに動き回ることであり、不動は、動きまわらずに一定のところに留まっていることを指す。ウェットティッシュの事象は、軽く、持ち運びやすい機能性カテゴリと関連することで、特定の位置を持たずに適当な場所に遊動していく。

#### 4-2-9. 他物との関係

他物との関係は、ある事象が何らかの関連をもって同時に浮き立った他の事象との関係を指す。



4-5 テキストという事象

テキストという事象では、ペンが他物として取

りあげられている。勉強する時に利用する機能性カテゴリとの繋がりを持ち出されている。

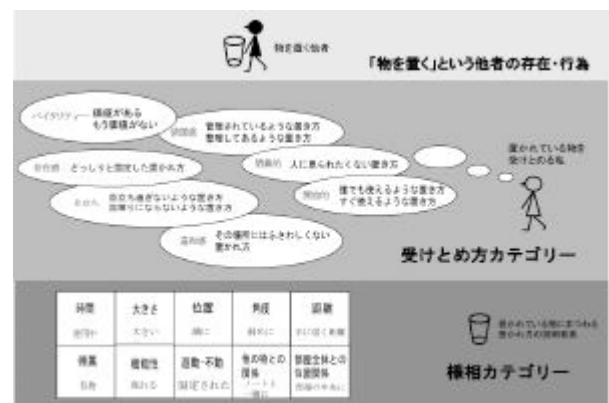
#### 4-2-10. 部屋全体との関係

部屋全体との関係は、他物との関係とは異なり、物と物の間の空間に対して「置かれている物」が事象として浮き立つ際の空間と事象の関係を指す。植物という事象では、植物が部屋の中央に位置する所に置かれていることで部屋全体の軸として受けとめられている。

### 5. 総合考察

以上の分析作業を通して、「置かれている物」全てに「物を置いた他者の存在や行為の目的」が隠れていることに気づいた。私たちは他者とある空間を共有する際に、ひとつひとつ他者の行動を直接見て判断している訳ではない。むしろ、気づかないうちに「置かれている物」という他者の影から他者の行動やこれからの行動の目的を読み取っていると思われる。

そうして「触ってはいけない」といった排他的なテリトリーを受けとめるだけでなく、「捨てても構わない」と受けとめ、他者と自分の行動をすり合わせながら共有する空間に馴染んでいくのではないだろうか。



#### 5-1 カテゴリー整理図

また、「置かれている物」を解釈する際に大きく立ち上がった軸に「時間」がある。通常「置かれている物」とは、他者が「物を置く」という過去に行った行為の産物である。

しかし、本研究を進めるにつれて、「置かれている物」は単なる過去の産物ではなく、過去から現在・未来へと繋がる状態を示しており、逆にある未来の目的に到達する状態を示していることに気づいた。「置かれている物」とは、現在そして未来の行動の痕跡であるとも考えることができるのではないだろうか。